

# 亡き息子との、約束を守るために……

福岡県／松原道明さん

**爽**

やかな秋空の下、南阿蘇の雄大な山並みがやわらかな陽光を浴びて輝いています。周辺の道路は今も教本が通行止めのままですが、この日は熊本地震からの復興と交通安全を願う大勢のライダーたちが、全国から集まってきました。

「阿蘇は、いつ来ても本場にすばらしいですね」

福岡からやってきた松原道明さん（69歳）はそう言って満面の笑みを浮かべます。今日は次女の美知恵さん（41歳）とともに大型バイクを駆り、親子で約150キロの道のりを走ってきました。道明さんは3人の子供たちが小さいときからバイクの乗り方を教え、家族でモータースポーツを楽しんできたそうです。

ふと、ライディングジャケットのファスナーを下ろした道明さんは、首から下げていた一枚の写真を優しく包み込みながら取り出しました。「ツーリング先で綺麗な風景に出会ったら、いつもこうやって、息子にも見せているんですよ……」

長男の和明さん（当時31歳）が突

阿蘇で開催された「ピースライド」のイベント会場で、次女の美知恵さんと。大型バイクを軽々と乗りこなす松原さん父娘は、まるで仲の良い友達同士のよう。



然この世を去ったのは、12年前の秋のことでした。会社からバイクで帰宅するため幹線道路を直進中、強引に右折してきた対向車に衝突されたのです。加害者は飲酒していたにもかかわらず、運転代行を呼ばずに運転。事故後は和明さんを救護せず、一時的にその場から立ち去りました。

「事故の4日後には、婚約者のお宅に挨拶に伺う予定でした。息子は、わずか三千円程度の運転代行料と引き換えに、命も、将来の夢も、すべて奪われてしまったのです」（道明さん）

**加**

被害者の行為が「過失」として処理されていく現状に疑問を感じた道明さんは、その後、「飲酒・ひき逃げ事犯に厳罰を求める遺族・関係者全国連絡協議会」に参加。仲間とともに10年間で60万筆を超える署名を集め、法務大臣に提出しました。そして、2013年11月、ついに「自動車運転死傷行為処罰法」の成立にこぎつけたのです。

「飲酒事故をなくしたい……」

今もその思いを胸に、中学校や大学で命の尊さを伝える活動を続けて



ブルーのジャケットに身を包み、優しく微笑む写真の中の長男・和明さん。道明さんはこの写真を肌身離さず、いつも一緒に旅をしてきた。

います。今年10月には福岡県警交通捜査課の警察官に、11月には警察幹部の前に、交通事故遺族としての立場から講演を行いました。

まもなく70歳を迎える道明さん。バイクに乗るその姿は颯爽としていて、年齢を感じさせません。

「実は息子が、亡くなる少し前に『どれだけ安全運転していてもバイクは弱者。誰かに万一のことがあってもバイクが悪いんじゃないから、乗り続けようね』、そう言ったんです。僕はそのとき、なにげなく『わかったよ』と答えました。それが、息子と交わした、最後の約束になりました。だから、もう少し一緒に走り続けよう……、そう思っています」